

# 芝蘭堂の門人たち 蘭学の地域的広がりを中心に

鈴木幸彦

Pupils of Sirando

序にかえて

- ①「載書」の門人帳としての性格
- ②芝蘭堂門人たちの分析
- ③芝蘭堂門人の医学塾による蘭学の地域浸透
- ④その他の芝蘭堂門人にみる蘭学の地域浸透  
まとめてかえて

## 【論文要旨】

太楢玄沢の蘭学塾芝蘭堂の門人帳「載書」は、誓紙・誓文としての性格を有する門人帳であり、玄沢門下において一定の学習・修行を経過して、より上の段階の医術を伝授される際に署名・血判したものであったと考えられる。従つて「載書」に記載されるべき人数は、当初からおのずと限定されたものであった。

この「載書」に記載されている芝蘭堂門人九四名中、庶民身分出身の者が少なくともその四分の一弱であり、また、薫医出身身分の者たちが帰郷後に開いた医学塾の門人たちのうち七割前後から八割前後の者たちは民間医または庶民出身の者たちであった。

また、民間医等庶民出身身分の芝蘭堂門人が京・大阪・広島等で開いた医学塾では二、三百人から千人余の門人を育て、その中から多くのすぐれた蘭学者が輩出している。その他の地域でも多くの庶民出身の医者・蘭学者を育てて行き、かつ、それぞれの地域での医療活動に従事し、庶民の病苦を救う大きな役割を果していった。

もつとも、漢方医中心の当時の医学界において、オランダ渡りの薬品入手が困難だったこともあって、蘭学あるいは蘭方医学が必ずしもストレートに地域に浸透したものとは考えにくいが、症例診断なり施療なりの際には蘭方医学の基本的な見方・考え方・技術が活用されたことであろうし、また投薬する際にも部分的にはオランダ渡りの薬品が使用されたこともあつたろうから、全国各地の庶民は何らかの形で蘭方医学の恩恵に預かったものと考えられる。

また、芝蘭堂門人およびその子孫の多くは医者としての生涯を貢献し、幕末の軍事科学への関心が強まる中でも、地域医療に専念する者がほとんどであり、戊辰戦争の際に従軍する者も若干存在したが、それは軍医的な存在の域を出ず、戦乱終了後は地域医療の近代化という大きな役割を担つていった。